

近代における仏教女子教育について

——高等女学校の場合——

斎藤 昭 俊

一 仏教女子教育の変遷

明治期の女子教育は開拓使次官黒田清隆の欧米視察のとき、外国女子の教養の高きを知り、教育ある女子の養成のため女子の米國留学を建言して、女子海外留学生五名を明治四年十一月米國に送つたことに始まる。ついで同年十二月文部省は布達を出し、「人々其家法ヲ昌ンニシ、是ヲ能ク保ツ所以ノ者ハ男女ヲ論ゼズ各其職分ヲ知ルニヨレリ今男子ノ学校ハ設アレドモ女子ノ教ハ未ダ備ラズ故ニ今般西洋ノ女教師ヲ雇ヒ共立ノ女学校相開キ華族ヨリ平民ニ至ル迄受業料ヲ出シ候ハバ入校差許候間志願ノ者ハ向申正月十五日迄当省へ可願事 女学校入門ノ心得但当分英學ノ事 一、受業料毎月金貳兩可相納事 一、書籍等ハ銘々持參可致事 一、稽古時間ハ毎日五時間ノ事 一、生徒ハ女子ハ才ヨリ十五才迄ノ事 但凡テ通ヒ稽古ノ事」といつている。学制頒布被仰出書には

「幼童ノ子弟ニ男子ノ別ナク……」とあるが、女学校制度は仲々定まらず、二十年に至つても、その数は二十校にみたなかつた。しかし、その中で民間では二十年頃までにキリスト教宣教師によるミッション・スクール、跡見花蔭、河村重子などの私立学校が先驅的役割を果たしたのであつた。フェリス女学院、女子学院が明治三年に創立されて以来、二十一年までにキリスト教の学校は一〇一校に及んだ。二十六年に至り女子教育に關する訓令がでて、百人中女子は十五人にすぎないとして就学の勧誘をしている。二十二年までにミッション系三十校、一般キリスト教系四校の創立をみているが、仏教の場合は二十一年頃より始まる。女子文芸學會（のち千代田女学校）、六和、相愛などがある。淑徳女学校を明治二十五年に創めた輪島聞声は、その始めは尼衆学校の開設を願つてゐた。それは明治十九年十月浄土宗務所學監あてに出された建議案に明らかである。尼衆学校は福田行誠が二十年に浄土門

主となつた翌年尼衆教場が開設され、二十二年には東京尼衆教場、ついで愛知にもつくられた。二十四年九月十七日輪島聞声は浄土宗務所学監あて、普通女学校設立願を出して許可されている。その中で、女子の学校が多くなっていること、キリスト教が女子教育に力を用い、布教の拡張につくしていることをあげている。このように仏教教育においては男子の場合と同じく尼衆教育から、一般女子教育への線であることが第一点としてあげられる。

明治三十二年に顯道女学校（のち文中女学校、京都高等女学校）を創立した甲斐駒藏、和里子は本願寺が女子教育に手がまわらないというので、独立で創めたものである。甲斐和里子は足利義山の第五子として寺に生れ、同志社に学んで、かえつて仏教信仰を強めた。同志社で英語を学ぶために入り、そしてキリスト教信仰に入つていつた人達をみて、仏教主義学校の必要性を痛感したという。このように、仏教女子教育はキリスト教女子教育より二十年近くもおくれ、更にキリスト教女子教育に刺戟された事が第二点としてあげられる。

仏教が明治期の後半から女子の就学率が次第にのびてきたという社会的状況によつて漸く女子教育に手を染めるに至つた事が第三点としてあげられる。その就学率は三十年に至ると、五〇%をこすに至る。このような状況下で、仏教各宗が女子教育に注意をむけ、明治期末には仏教主義女学校の概数

は四十五に及んだ。しかし、キリスト教が男子教育より布教の面から女子教育に力を入れたのに反し、仏教ではその数が仏教主義男子中学校の約半数にしか達していない。仏教の場合には普通教育より僧侶教育に力点をおき、又、男子中心性社会を強く反映して男子教育に主力をおいたものと見る事ができる。大正期に入ると経済的によくなり、大正五年以降は女学校入学志望者が激増してくるが、内容からみるとまだ不安定である。

二 仏教女子教育の目的

家業を昌んにし、これを維持することが学制制定当時のかゝげられた目的であつたが、女子の場合の家業は裁縫、手芸、茶の湯、生花を教えることが目的であつた。例えば女子文芸学舎のカリキュラムをみても、和服裁縫（六）洋服裁縫（六）編物（六）插花（三）点茶（三）和歌（二）英語（六）算術（三）（甲種の場合）となつている。又、福沢諭吉は「古来我国の女流に最も重んずる所のものは裁縫の一事にして、貴賤貧富を問はず苟も其嗜みなきものは女子にして女子に非ず」とあるように、裁縫が基本的な目標であつたが、徳川の閉鎖社会から、とき放たれ、外国文化への大きな憧れ、学問への憧れがあつた。女子文芸学舎でも英語が入つているのは、大きな時代的流れであつた。それと結びついて華やかであつ

たのがキリスト教系女学校である。これは外見上、風俗上の差異が西洋化という形で、ミッジョン・スクールを通して行われた事を物語るものであるが、その目的としたのは清教徒的な純潔な淑女を育てることであつた。このようにカリキュラムに表われた家事と文明とは対照的に見られるのである。が、明治期の日本の女子教育の観念は藏原惟郭（女子教育の方針に対する意見・明治三十年）に見られるように、家庭主義と国家主義にあつたのである。国家のための家庭、夫唱婦隨の家庭を強調したもので、謙讓と、責務遂行、辛苦にたえる、家庭の犠牲となることを核としている。このような女性観は必然的に良妻賢母の概念を規定するし、良妻賢母の内容となつてきているのである。それでは仏教においてはどうかあつたろうか。明治三十三年の大谷女学校の設立計画の中には「日本固有の女徳を涵養し、将来良母たり賢妻たるに尤も適当なる學術技芸を教授し、女子をして其天職を完うせしめんといふに在り」とあり、明治二十六年淑徳女学校内にできた淑徳婦人会は、「第二条本会は仏教に信順し婦人の淑徳を涵養し、其教育を補助するを以て目的とす 會員心得 一、會員は四恩を報し十善を守り倫理を明にする事 二、會員は自己の信ずる所を以て普く有縁の人に及ぼし等しく教益を得せしむる事 三、會員は老者を扶け、病者を慰み貧困を濟ひ及災厄に羅る者を賑恤する事」に見られる如く、前者は日本

固有の婦徳、後者は仏教的淑徳をあげている。明治三十八年仏教的淑徳を次のように石塚竜電は分析している。「一、清純——「淑」は「きよい」の意味で和やかな愛らしい語をきく時に初めて、この顔、身の回り、語と心とが清浄になること。二、礼儀——礼儀なければ威厳を欠く。三、謙遜——傲慢ならば婦人の品格がない。美人でも知識ある人も謙讓でなければ完全とはいふがたい。四、信仰——仏の力をもつて各自の心を磨き、敬虔の態度を持せよとあるが、個人的徳性、個人的人格の陶冶の面が強く出てきている。大正期に入つて荻原雲来は淑徳を勤儉、正直、敬信、慈愛の四徳兼備としている。怠惰でなく、驕奢でなく正直にして、神仏を崇敬し、慈しみの心をもつことだといつてゐるが、これを女子の個人的人格の目的としてあげてゐるのであり、こゝには国家主義的傾向はみられない。このように仏教女子教育の目的には日本固有の婦徳と仏教的淑徳（宗教的教養）の二面が見られるが、仏教的淑徳の内容が即ち国家主義的婦徳とはなつていないが、時代的潮流となつた日本固有の婦徳の教育と、どのように融合し、又は反撥したかは興味ある問題であり、そこで深められた宗教的教養と信念が個人の社会生活の基調となり得たかどうかを跡づけることは必要なことである。

三 仏教女子教育の内容

仏教系の女学校を客観的に把握するために、大正五年度の文部省調査をみると、高等女学校二三五校、実科高等女学校（高等女学校実科を除く）は一五六校である。この中で仏教系のものは高等女学校七校、実科女学校二校、高等女学校実科三校であつた。高等女学校では淑徳、東洋、千代田、京都、相愛、成田、筑紫、実科高等女学校には淑徳、千代田、華頂、相愛、敬愛がある。この中、淑徳、千代田、相愛は併設である。高等女学校については全体の二・五%、実科女学校については一・三%しか仏教系が占めていないことになる。生徒数からすれば、高等女学校九三六九〇名中、二七三〇名であるから二・八%、実科女学校は三六八七一名（併設を含む）中七七〇名で、二・一%である。極めて微々たるものである。しかし、正規の高等女学校、実科女学校の認可をうけていないものが、他に約四〇校と推定されるが、今はさておいて、正規の学校の教科の内容は裁縫を主としたものである。正規の女学校、二三五校中、正科目の外国語、図画、音楽の三教科中、外国語は正科、随意科に分けられて居る。やゝ特色とみられるのは加設科目中教育を正科としているのが仏教系に多く、全体の十一%になつてゐる。実科女学校の科目についてみれば、図画、唱歌、家事が正科となり、

外国語が任意科に入る。こゝでも教育を二校がカリキュラムに入れている。教員についてみると、教員有資格者、無資格者、小学校正教員の全国総計がそれぞれ、七六%、十七%、七%となるが、淑徳は九五%、東洋五四%、千代田七三%、京都七二%、相愛六五%、成田五五%、筑紫六六%と有資格教員を全国平均七六%以上にそろえているのは、わずかに淑徳のみである。

生徒についてみると、東京は一・九倍、京都一・三倍、大阪二・〇倍の入学競争率を示しているが、仏教系女学校のそれぞれについて調べると次の如くなる。淑徳一・五倍、東洋一・四倍、千代田一・三倍、京都一・三倍、相愛三・〇倍、成田一・二倍、筑紫一・八倍、全国平均一・七倍となる。全国平均をはるかに上廻るものは相愛であり、やゝ上廻るもの筑紫で、地区平均と同じものが京都である。七校を平均した競争率は一・七倍で全国平均と同じである。

前年度中（大正五年度）の中途退学者数をそれぞれの学校について調べると、淑徳、41・28・18・3・0・計90、東洋15・14・15・9・0・計53、千代田12・16・9・5・0・計42、と一年、二年、三年、四年、五年の総計九五五名となり、東京地区一校平均三四名となり、三校とも多い数を示している。京都6・6・12・3・0・計27で、京都地区一校平均の中途退学者は二十一名であるから、京都高等女学校の二

近代における仏教女子教育について（斎藤）

七名も平均を上廻る。次に相愛、成田、筑紫については、相愛11・16・12・4・0・計43で、大阪地区一校平均三十一名で、成田2・7・3・1・0・計13、千葉地区一校平均七名で、筑紫11・12・9・5・0・計37で、福岡地区一校平均37で、いずれも仏教系女学校の生徒の中途退学者は、平均を上廻っている。その理由をみると

	家事都合	徴戒	死亡又は病氣	転学	その他
淑徳	59	・	18	13	・
東洋	31	・	15	7	・
千代田	30	・	7	5	・
京都	11	・	5	10	1
相愛	19	・	4	11	9
成田	10	・	1	2	・
筑紫	16	・	9	12	・
計	176	・	59	60	10

となつて、家事都合、転学、死亡又は病氣の順になつている。徴戒によるものが全くないが、他の学校にも殆んど見られない。家事都合が多いのは景氣の変動で女子が安易に学校をやめさせられていることで、女子教育の不定着を示しているものとみられよう。しかしこれによつて仏教系女学校のやや平

均的な学校内容を見ることができた。

四 仏教女子教育の問題

女子教育において、キリスト教主義女学校が先駆的役割を果たした関係で、その欧化主義と進歩性に対抗し、アピール出来るものを打出すことが困難であつた。そこで婦徳の涵養という人格形成の面での役割を担当するに至つた。そして、いきおい日本伝来の婦徳に仏教的淑徳を結びつける関係をもつことになる。仏教主義女学校の内容を見ると必ずしも優れているとはいえないが、やゝ平均に近い組織体制をもっているが、各々の特性と役割については検討し得なかつた。明治期から大正期初期にかけて、仏教主義による女子教育について論陣をはるものも少なかつたが、大正末から昭和初期にかけて現われてくる。高楠順次郎、中根環堂は仏教によらねば女子教育、精練された、円満なる人格形成は難かしい点、特に女性的特質と宗教性、感受性と執着性から女子教育の必要性を説いている。実際に女子教育をすゝめた輪島聞声、朝倉暁瑞らの実践的女子教育家があげられるが、一般には、女子教育への取り組みが極めて遅かつたのは仏教が僧侶教育を中心とし、更に布教についての取組みの薄さ、男子中心社会性による影響、仏教教育における独自性の欠如がその主たる理由と考えられるのである。